



Title	ムリロ・ルビアン「バルバラ」：作家と作品紹介
Author(s)	平田, 恵津子
Citation	ブラジル研究. 2008, 3, p. 71-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106442
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ムリロ・ルビアン「バルバラ」

ー作家と作品紹介ー

平田 恵津子

はじめに

本稿の目的は、幻想と現実が交錯する小説世界を描いたブラジルの短編作家ムリロ・ルビアン (Murilo Rubião) を紹介し、彼の作品のなかから選んだ1篇の短編小説「バルバラ」(“Bárbara”) の翻訳を試みることにある。

ルビアンは1916年、ブラジル内陸部ミナス・ジェラエス州(略してミナス)の小さな町で生まれ、その翌年、家族とともに州都ベロ・オリゾンテ市へ移り住んだ。文法学者で、ミナス文学アカデミーの会員でもあった父親をはじめとして周囲に文筆家が多かったこともあり、彼は幼い頃から読書に親しんだ。後に彼は、グランヴィレ・ボンセのインタビュー¹にこたえ、子供の頃に読んだおとぎ話、『旧約聖書』、『千一夜物語』、『ドンキホーテ』が彼をファンタジーの世界へ導いてくれたこと、その後愛読したゴーゴリ、ホフマン、ポー、ピランデロ、ヘンリー・ジェームズらの作品のなかでも、特に、ブラジルの写実主義作家マシャード・デ・アシス (Machado de Assis, 1839-1908) のそれに強い影響を受けたことを語っている。大学時代には、法律を学ぶかたわら文学とジャーナリズムに従事し、卒業後は、おもに州政府の職員として働きながら、創作活動を続けた。連邦政府から派遣されて、スペインのマドリッドにあるブラジル大使館で働いた4年間をのぞき、1991年にこの

世を去るまでベロ・オリゾンテを離れることはほとんどなかった。

生まれ育ったミナスの風土、幼年時代の読書体験、長い公務員生活、そしてユダヤの出自といったルビアン¹の伝記的背景は、彼の文学を読み解く上で看過することができない重要な鍵となっていることをここで指摘しておきたい。

ルビアン²の小説は超自然的現象、非日常的、非現実的事物で織りなされている。人間の言葉を話し、変身を繰り返すうさぎ、依頼を受け、目的もわからないままひたすら天に向かってビルのフロアを積み上げていく建築士、匿名の招待状を受け取り、着飾って豪邸のパーティーへ出かけたものの、そこから脱出できなくなってしまう男、人間の町へやってきて、無垢さを失い墮落していくドラゴンたち。これらの不可思議な生き物や人間がルビアン³の小説世界の住人で、架空の都市を舞台に彼らの物語が繰り広げられる。登場人物がポルトガル語名であることはともかく、時代背景や筋の展開から、ブラジルの町がモデルであることを思わせる作品もあるが、ルビアン⁴文学にブラジルの土着的な色合いはきわめて薄く、むしろいかなる都市でも起こりうるできごととして物語は進行していく。

ルビアン⁵の幻想的な作風はしばしば、カフカの影響や、1960年代に「ラテンアメリカ文学のブーム」として世界の注目を集めたスペイン語圏ラテンアメリカの魔術的リアリズムとの類似が指摘されてきたが、彼が描きだす夢想的で不合理な小説世界は、伝統的に写實的傾向が強いブラジル文学において、なかなか受け入れられなかった。1947年に初の短編集『元マジシャン』(*O ex-mágico*)を上梓したものの、彼の作品がブラジル国内で広く読まれるようになるのは、1974年、4作目となる短編集『花火師ザカリアス』(*O pirotécnico Zacarias*)がブラジルでベストセラーとなってからのことである。

1970年代、ブラジルでルビアン⁶が作家として一躍有名になった背景には、60年代の「ラテンアメリカ文学のブーム」があったと考えるのは妥当であろう。ルビアン⁷の作品を、安易に魔術的リアリズムのなかに位置づけ

ることには疑問があるが、近隣諸国で火がついた「ブーム」は少なくとも、ブラジル文学においてほとんどなじみがなかった幻想、非日常、魔術的要素に目を開かせることになった。

ルビアンは生前、七つの短編集を出したが、そこに収められている作品は合わせて32篇である。短編集の数に比して、作品の数が少ないのは、同じ作品が異なる短編集に重複して掲載されていることを示す。ルビアンは、一度発表した作品に何度も手を入れ、繰り返し別の短編集に掲載したのである。ちなみに、ベストセラーとなった『花火師ザカリアス』に書き下ろしの作品はまったく含まれず、しかも、そこに収録された全8篇の半数にあたる4篇は、27年前のデビュー短編集『元マジシャン』で発表されたものであった。作家による作品の手直しは、単なる語句の入れ替えから、段落ごとの削除、タイトルや結末の変更にいたる、さまざまなレヴェルで行なわれた。書くというより書き直していた、と言われるルビアンのこの特異な創作方法は、表現することに対する単なるこだわりというより、強迫観念に近い作家の焦燥をあらわす一方で、その小説世界の特徴を象徴するものにもなっている。この点を含め、ルビアン文学に関する詳しい論考は別の機会に行なうこととし、ここでは彼が書き残した短編小説のひとつ、「バルバラ」²を訳出したい。

翻 訳

バルバラ

「悟りの道を離れる者は、
死人の集会のなかにもある。」³
(「箴言」21章16節)

バルバラはねだることだけが好きだった。ねだっては太っていった。

どんなにばかげたことのように思えても、私は常に彼女の気まぐれにこたえようとした。こんなに変わらず身を粉にして尽くしているというのに、そのお返しとして私が彼女から受け取るのは、ぼんやりした優しさと次から次に出てくる新たなおねだりであった。私は、欲望が大きくなるにつれてふくれあがる彼女のからだの成長を見守るのに精一杯で、そのすべてを記憶にとどめてはいない。もし彼女が、私が彼女に与えていたものに注ぐ愛情の一部だけでも向けてくれたなら、あるいは、そんなに太っていきさえしなければ、その病的な習癖を満足させるために私が払っていた犠牲を私はさほど気にはしなかったであろう。

ほとんど同い年の私たちは、小さい頃はいつも一緒にいた幼なじみで、恋人同士となり、婚約者となって、そしてある日、結婚した。いや、実は私たちはずっと単なる連れにしか過ぎなかったことを、私は今なら打ち明けることができる。

子供につきものの分別のなさが私にまだ残っているあいだは、彼女の異常さに悩まされたりしなかった。バルバラはきゃしゃな女の子で、そんなにでっぷりした体型になるような悪さはしていなかった。そんなことを考えていると、私は登っていた木から派手に落ちてしまった。その木には、私の連れがむさぼるような目つきで、まずそうな実か小鳥の巣を見つけだしていた。ただバルバラの願いをかなえるためだけに男の子たちをののしるはめになり、そのお返しに殴られたこともある。そして、もし私が顔にけがをして帰れば、彼女の喜びはさらに大きくなっていた。彼女は両手で私の頭を抱きかかえ、腫れあがった私の顔をうっとり見つめながら幸せを感じていた。まるで、あざが、私が彼女にあげた贈りものであるかのように。

ときどき私は、彼女が絶え間なく太っていくのを見て、彼女の要求を聞き入れまいとした。しかし、私の優柔不断は長くは続かなかった。彼女の執拗な視線は、もっとも取るに足らない頼みごとすら正式な命令へと変え、私を打ち負かしていたのである。(あんなに途方もないおねだりを私にするとき、

彼女の目にはなんとという優しさがやどっていたことか、それはなんと説得力のある雰囲気漂わせていたことか！)

...

そう、こんなこともあった。私は冷酷を装って、つぎにおねだりをしようものなら、おまえを捨ててやるぞと彼女を脅かしのである。

私の警告は、ある程度までは望ましい効果をあげた。彼女は攻撃的な沈黙に逃げ込み、私と会話したり、食べたりすることを拒んだ。私の前から逃げ出し、裏の菜園にかくれ、あたりを悲しみでいっぱいにして私を苦しめた。お腹は驚くほど大きくなっていくのに、からだはやせ細っていった。妻がおねだりをしないことで、なにか新たな現象が引き起こされるのではないかと疑いを抱き、私はふるえあがった。医者がそんな私を落ち着かせてくれた。あの巨大なお腹はただ、子供の誕生を予告するものであった。

浅はかな希望から、私は子供の誕生がバルバラの奇癖を一度になくしてくれるだろうと信じた。そして、彼女がやせて青ざめているのは深刻な病の前触れではなかろうかと怪しみ、病気にかかって、お腹のなかの子供が死んでしまうのではないかと不安になった。私はそんなことが起きないように、何かねだってくれと彼女に懇願した。

彼女は大海をほしがった。

私はなんの不服もとなえず、その日のうちに、海岸をめざして長い旅へ出た。しかし、海を目の前にして、私はその大きさにおののいた。注文に比例して妻が太っていくことを心配し、海の水を入れた小さなビンだけを持ち帰った。

帰宅して、自分がしたことを謝りたかったが、彼女はそんな私を気にもとめなかった。私の手からそのビンをひったくると、そこに入っている液体をうっとりながめていた。それからそれを肌身離そうとしなかった。腕のあいだに小ビンを抱えて眠り、目覚めるとそれを陽の光にかざし、少しばかり口

に含んでいた。そのあいだ、彼女は太っていった。

バルバラの異常な肥満が気にならない瞬間もあった。そのようなとき、私の懸念は恐ろしく膨張していた彼女のお腹に向けられていた。それをおおっていた脂肪はこちんまりとしていたが、お腹があまりにもふくらんだので、その巨大なかげに隠れて彼女は見えなくなっていた。私は、そこから巨人が出てくるのではないかと気がかりで、超肥満体の女と、性格まで母親譲りで、ねだらずにはいられない化け物のような息子のそばで暮らすのはどんなに恐ろしいことか思い浮かべていた。

がっかりしたことに、1キログラムの、弱々しく醜い生きものが生まれてきた。

最初の一瞬からバルバラはその子を拒絶した。小さくてぶかっこうだったからではない。ただ、自分がそれをねだったわけではなかったからである。

息子の泣き声と空腹が気にならない母親の無神経さは、その子を抱いて育てることを私に強いた。子供が食べるものをほしがって泣いているあいだも、彼女はそのままとして、ミルクがいっぱい詰まった胸をわが子に差し出すことを拒んだ。

彼女は海の水に飽きると、隣の敷地に植えられたバオバブの木をねだった。夜が明けきらないうちに、私は子供がぐっすり眠っているのを見はからって、隣人の裏庭との境界を仕切っていた塀を乗り越え、木の枝を1本、力まかせに引きちぎった。

家に帰ると、夜が明けるのを待ってそのプレゼントを妻に渡そうとは思わなかった。私は小さな声で名前を呼びながら彼女を起こした。彼女は自分がなぜ起こされたのか、その理由を想像しながら、にっこりと目を開けた。

「どこにあるの？」

「ここだよ。」私は背中に隠していた手をさし出して彼女に見せた。

「ばか！」私の顔につばを吐きかけて彼女は叫んだ。「枝なんか頼んじやないわ。」そして、私がバオバブの木はあまりにも枝葉が広がっていて、高さは10メートルにも達するんだと説明する間も与えず、そっぽを向いた。

数日後、隣家の所有者が木だけを売ることに同意しなかったもので、私は法外な値段で土地家屋のすべてを手に入れるしかなかった。

取り引きが成立すると、私は数人の男たちを雇った。彼らはつるはしとクレーン車を装備して、バオバブの木を引っっこ抜き、それを地面に横たえた。

彼女はまるで中学の女子生徒を思わせるように、楽しそうにぴょんぴょんと、その太い幹の上を行ったり来たり跳び越えながら何時間も過ごした。またそこに、絵や名前を刻み込んだ。私は自分の名前がハートマークの下に書かれているのを見つけてひどく感動した。しかしながら、これが、私が彼女から受け取った唯一の愛情表現だった。思い出してくれたことに対する私の感謝の気持ちにはおかまいなしに、葉っぱがしおれ、やがてバオバブの木が枯れてしまうのを見ると、彼女はそれへの興味をうしなった。

彼女はおそろしく太っていた。私はその異常な執着心から引き離そうと、彼女を映画館やサッカー場へ連れ出した。(子供は腕の中に抱えていかなければならなかった。と言うのも、息子は生まれて数年たっても同じ大きさのままで、ほんの数センチも成長していなかったのである。) そのような機会に彼女の頭を最初によぎるのは、映写機や、選手たちがたわむれていたボールをねだることであった。彼女は自分の望みをかなえるため、観客のごうごうたる非難のもと、私に上映や試合を中断させていた。

ずっと後になって、私は彼女のふるまいを変えようとする自分の努力が無駄であったことを確証した。彼女が私の愛を理解することは決してないし、ひたすら太っていくのであった。

私は彼女の好きなようにやらせることにして、あきらめの境地で新たなおねだりを待った。もういくつかで終わりになるだろう。私はすでに、彼女の奇行にひと財産費やしてしまっていた。

...

ある日の午後、愛情に満ちた様子で彼女が近寄ってきて、私の髪をやさし

くなでた。私はびっくりして、なぜ彼女がそのようなふるまいをするのか、すぐには思い至らなかった。彼女は自分からその理由を明らかにした。

「もし船があれば、どんなに幸せかしら！」

「でも僕たちは貧乏になってしまうよ。食べるものを買うお金もなくなって、子供は空腹で死んでしまう。」

「子供のことなんかどうでもいいわ。船を手に入れましょうよ。それが世界で一番美しいものじゃないの。」

私は腹が立ち、彼女の言葉におもしろみを感じられなかった。それまで船をまったく見たことがなく、ビンをとおしてしか海を知らないのに、どうして船の美しさがわかるかと言うのだ？！

私は怒りをおさえ、再び海岸地帯へ向かって出発した。そして港に停泊していた大型客船のなかから、一番大きいものを選んだ。それを解体するよう命じ、私たちの町まで運ばせることにした。

私は悲しみに暮れて帰途についた。船のパーツを運んでいた無数の車両の最後尾で、息子は不安げに私のほうを見ながら、なぜ列車がそんなに何度も意味もなく警笛を鳴らすのか、知ろうとしていた。

バルバラは、電報で知らせを受け、鉄道駅で私たちを待っていた。うれしそうに私たちを出迎え、小さな息子には冗談さえ投げかけた。

区画に分けられた広々とした場所で、バルバラは船体の組み立てのもっとも細かいところまで見守った。私はげんなりして、暗い気持ちで、地面に腰をおろしていた。そしてときには、そのか細い足で歩くことは一生ないであろう息子のほうを、またときには、あまりに太りすぎて、たとえ何人もの男たちが手をつないでも、抱きしめることができないであろう妻のからだのほうを見やった。

船が組み立てられると、彼女はそっちへ移動して、二度と地上に降りようとはしなかった。船と関係のないものにはまったく興味を示さず、いく日もいく晩も甲板で過ごした。

船を購入して残り少なくなっていたお金は、まもなく尽きてしまった。空

腹がやって来ると、男の子は足をばたばたさせて、草の上を転げまわり、土で口をいっぱいにした。息子の泣き声はもはや私の心を動かさなかった。私は、食べるものがなくて、やせることを期待しながら、妻のほうに視線を向けていた。

彼女はやせなかった。反対に、もう数十キロ肉をつけた。その度を越した肥満は彼女が船室に入ることを許さず、彼女の散歩は後甲板に限られてしまった。その空間で彼女は、何とかからだを移動させていた。

私は子供を連れ、妻の監視の目をかすめることができれば、大型客船の木片や金属のかたまりを盗み、食料に換えていた。

...

ある晩、私はバルバラがじっと空をながめているのを目にした。彼女が月に視線を向けているとわかったとき、私は子供を床に放り投げ、あわてて彼女がいる場所へ上っていった。そして、最高の論法でもって彼女の注意をそらそうとした。私の言葉が役に立たないことに気づくと、つぎに、彼女の腕を引っばろうとした。それも無駄であった。私が引きずるには、彼女のからだはあまりに重すぎた。

私はどうしてよいかわからず、途方に暮れて、甲板のかこいにもたれかかった。私は彼女のあんなに深刻な表情を、あんなに食い入るような視線をいまだかつて見たことがなかった。あれが最後のおねだりに違いあるまい。私は彼女がそれを求めるのを待った。もはや誰にも彼女を抑えることはできない。

しかし、その数分後、私は安堵のため息をついていた。彼女が望んだのは月ではなく、そのすぐそばにあるほとんど目に見えないちっぽけな星であった。私はそれを取りに出かけた。

[注]

¹ José Adolfo de Granville Ponce, “O fantástico Murilo Rubião.” In: *O pirotécnico Zacarias*, Murilo Rubião, 16ª edição, São Paulo, Ática, 1993, pp.3-5.

² 本作品は、1947年、ルビアン初の短編集『元マジシャン』で発表されたが、他の作品と同様、その後何度も手が加えられ、『花火師ザカリヤス』にも掲載された。今回の翻訳にあたっては、作家がこの世を去って7年後の1998年に出された『短編集』(*Contos Reunidos*)に収録されたものをテキストとして使用した。そこには、ルビアンが残したすべての作品—未刊のままになっていた1篇を含め、合計33篇の短篇小説が、作家が最後に手を入れた形で収められている。

³ ルビアンの短編小説にはすべて、旧約聖書からとられたエビグラフが付されている。本編のエビグラフの翻訳にあたっては、日本聖書協会から出されている『聖書』の訳を参照させていただいた。

参考文献

『聖書』日本聖書協会、1980年。

Arrigucci Júnior, Davi. “O mágico desencantado ou as metamorfoses de Murilo.” Introdução. *O pirotécnico Zacarias*. São Paulo: Ática, 1993.

Moraes, Marcos Antonio de, ed. *Mário e o pirotécnico aprendiz: cartas de Mário de Andrade e Murilo Rubião*. Belo Horizonte: Ed. UFMG; São Paulo: IEB-USP; Ed. Giordano, 1995.

Rubião, Murilo. *Contos reunidos*. 2nd ed. São Paulo: Ática, 2005.

_____. *O pirotécnico Zacarias*. 16th ed. São Paulo: Ática, 1993.

Schwartz, Jorge. *Murilo Rubião: a poética do uroboro*. São Paulo: Ática, 1981.